

「思春期の子どもへのかかわりについて」

幼児期の子どもの姿

「いやいやの2歳児」 ←大人からの視点・呼び名「反抗期」

↓

自我が発揮される時期：自分の領分を広げていき、他者とのぶつかり合いが生まれる時期

反抗を目的にしているのではなく、自分なりにやってみたいという強い願望が沸き、「自分」と向き合っていく。

幼児期の節目に矛盾や葛藤を経験し、乗り越えたときに新しい自分をつくることができる。

療育の側面から考えると、子供たちが過度な葛藤やフラストレーションを受けずに経験できる機会があるとよい。

いやいや期だからと済ませるのではなく、何が課題になっているか、次の獲得すべきスキルは何かを適切にアセスメントして、子供たちが自分の力や援助を求めることもあることで成功の経験を積める。

子どもの思いに耳を傾け、共感すること、保護者の思いを伝えること

※子供とかかわっていく中での大切にしていくこと、その日の狙いはなにかを明確にしていくことが大切。

そこがぶれると支援の在り方が曖昧になってしまう。

子どものことをよく知る。(学年、好きなこと、困っていること、家庭や学校での過ごし方 など)

学童期

失敗したり、つまずいたりすることが多い。

→他者と比較してしまうことが多くなる。自信を無くさないように、できるための方法を一緒に考えていくのが大切になってくる。

青年期

同一性が発達する。自分とはどんな存在なのか、社会とどんなかかわりを持つのかを知っていく時期

→学童期の中での失敗も乗り越えていき、得意不得意を知りながら、ポジティブな側面で補っていくことで自分がどんな人間かを知っていき、**アイデンティティーを確立し自分自身の価値観を知っていく**

思春期

中学生になると今までかかわりのなかった人とかかわりも増え、異性や他者がより気になる。

→人にどうみられるかを気になるようになる。(ひとにみられる、睨まれている、など)

グループやクラス、部活などのそれぞれの場での自分の「立場」「役割」を使い分ける。

理想だった人に対してある種の「がっかり」や疑問が生まれる。

同時に「自分とは何者か」「自分は何にをやりたいか」が見えてくる。

↓

反抗的な態度や口答え、無視などが始まる。

「他人の影響から脱する。」「自分が自分の人生の主人公になっていく」

思春期は自我が急速に豊かに伸びるため言語が追いついていない状態 「自分を知ることは困難」

中学生に大人が質問すると「別に」「微妙」と答えるだけのことが多い。

→子どもは何も考えていないわけではなく、感情が複雑になっていることも考えられる。

そう思って子どもに助け舟をだすのが大人の役割

葛藤処理の身体化と行動化

思春期の頭痛、腹痛、倦怠感などの身体症状、不登校、朝起きられない。チックがみられることはある。

ストレス閾値の差により違いはみられてくる。

子どもの気持ちを大人が言語化して語り掛けると、子供は自分の気持ちを大人が理解していることがわかる。会話中に「なに?」「どうして?」と問われると自分の言語化が未熟だと、「別に」とか「微妙」としか言わざるえなくなる、

※「～かな?、・・・かな?」と例を挙げて選択肢を提示すると、それが彼ら自身の思い通りでなかったとしても、思いに近づけば、思いを言語化するきっかけをつかみやすくなる。

自立心と自立力

自立心が強く、自立力とのバランスが悪いと大人が「こどものために」と思って失敗を避ける声掛けをしても届きにくい。

1～10までの手助けでなく、子供のスキルや力に合わせて、必要に応じて手助けをしていく。

反抗期の子どもとの関わり方のポイント

- ・親子の会話の頻度が高いほど、子どもは自立心がある。
- ・説教よりも、会話を重視する気持ち
- ・転ばぬ先の杖より、見守る忍耐力
- ・親子の絆はどうかを常に考えて話す。叱って「出ていけ」は避けること。